未来ますこば知らこしば標町

第四十七弾
～円満院門跡・道明さんの“ああ、懐しのわが町・園城寺”編～

戦中から敗戦直後、
町にはさまざまな映画館が建ち並び
たくさんの人々が
行列をつくってにぎわった。
今は寂れてしまった商店街も
当時は信じられぬほど
買物客であふれかえっていたという。
ふりかえれば、
あれから
幾年の歳月が流れたことだろう…

取材に答える三浦道明氏。

天智・天武・持統、三帝の誕生水があるところから御井と呼ばれたものが後に三井となり、園城寺は別名を三井寺と呼ばれるようになった。その建立は七世紀の後半。今からおよそ一三〇〇年前のことである。一〇世紀から十五世紀にかけて五百年以上も比叡山延暦寺と争いつづけ、たび重なる焼き討ち・兵火にさらされた園城寺は、さらに豊臣秀吉の怒りも被った歴史をもつ。徳川家康、秀忠の加護を受けてからは隆盛をきわめ、四十九院五別所二十五坊をおこすに至った。

天皇の誕生水とのかかわりは不明だが、園城寺の中にある円満院には地下水が豊富に湧きでる見がある。紫外線消毒済・無料開放ということで、ここに水を汲みにくる人は絶えない。

また、円満院の近くにはそば屋もあって、ここでは"開運そば"を食べさせてくれる。このそば屋は円満院のご門跡が、直接味の指導をしていると聞く。その味から察するに、門跡さまはなかなか味にうるさいようである。取材対象としては楽しみな人物なのだが…

はたして円満院門跡・三浦道明大僧正にはどんな想い出があるのだろうか。開運そばがもたらすはずの幸運に腹っ…をふくらませて、まずは殿内へとむかった。

庭園の風景。池の中では亀がのんびりと泳いでいた。

昭和十六年。

三浦道明氏は滋賀県立女子師範付属小学校に入学した。当時ではめずらしい男女共学であったという。戦争がはじまったのはその年の十二月。ちょうど、近江神宮にお参りしていた日に真珠湾攻撃を知った。陸軍大臣になるのが夢で、僧侶になろうなどとは思ってもみなかったそうだ。

戦時中といえば暗い想い出話が多い。だが、道明少年はのびのびと毎日をすごした。小学校の床下にもぐりこんでは、秘密基地をつくって遊んだという。冒険ダン吉、のらくろ一等兵のメンコやセルロイドのおもちゃは、秘密基地になくてはならない宝物だ。そうしてまだ見ぬ戦場の模様を口をとがらせて仲間と語り合いながら、お国のために戦うことを誓う愛国少年となった。

大本営は国威発揚のニュースをつぎつぎと流していたが、日本は敗戦への道をまっしぐらに進んでいた。物資不足の記憶はあまりないと語る三浦氏だが、甘味に対する憧れはやはりあった。供え物のまんじゅうは、まさに垂涎のマト。ガマンできずに失敬？したこともたびたびだ。寺には時折日本軍の兵士が来て、キャラメルや鮭缶を置いてゆくことがあった。そのひと粒のキャラメルの香りと甘さ。鮭缶のうまさ。それは忘れられない。今でも当時を思い出して鮭缶を開けてみることがある。が、とてもあの味にはかなわないそうだ。泣く泣く着物や骨董品を農家に売払い、わずかな芋や米と引き換えていた家や、それも出来ずに飢餓線上をさまよった人々も多かった時代である。それからすれば、なんとも羨ましい話といえよう。

そして敗戦。

なによりショックだったのは、教師たちの話す言葉だった。昨日まで、鬼畜米英・欲しがりません勝つまでは式の授業を行っていた彼等が、突然、まったく違うことを言いはじめた。硯と筆をかたわらに置き、教科書の字句をつぎつ

円満院の庭園をのぞむ道明氏。

円満院の名水。たくさんの人々がポリタンク持参で訪れてくる。

疎水を眺め、かつての模様を語る道明氏。

疎水の風景。春には両側の桜がいっせいに開花し、えもいわれぬ風情となるそうだ。

知らずしらず懐かしの町

疎水には船頭のたつ船が浮かび、
木炭で動くトラックや
ハコ型の自動車が
のんびりと走っていた時代…
商店街はひしめく買物客でにぎわい、
一枚のチューインガムを
分けあって食べた
子どもたちがいた時代…

円満院のすぐそばにある美術館にて。後方に琵琶湖が望める。

ぎと塗りつぶす作業もさせられた。昨日まで信じていたことが、今ではデタラメとなり、誤りとなった。墨でほとんど真っ黒になったページを眺めながら、そのときはじめて

「ああ、日本は戦争に負けたんやなあ」

と痛感したという。

戦時中から映画はさかんだったが、敗戦を迎えてのち、町では映画館がますます栄えていた。大黒座、後楽座、帝国座、どこも超満員で往来には行列ができたという。すでに中学生となっていた道明少年は、仲間とよく映画館の看板をすり替える、というイタズラをしたそうだ。不思議そうな顔で右往左往する人々を物陰から眺めては、仲間と"次の計画"を練ったという。

疎水には船頭のたつ船が浮かび、木炭で動くトラックやハコ型の自動車がのんびりと走っていた時代。商店街はひしめく買物客でにぎわい、一枚のチューインガムを分けあって食べた子どもたちがいた時代。

今、かつて栄えた映画館は跡形もない。商店街にもかつての活気はない。気がつけば、人の波が園城寺町周辺から消えてずいぶんと久しい。あの頃にくらべれば、今の日本はずいぶんと豊かになったと思うのだが、

「もう一度、あの頃のにぎわいが戻らんものですかなあ…」

別れ際、門跡さまの横顔はすこしだけ寂しそうに見えた。

昔、商店街にあった映画館の跡地。今ではマンションになっている。

ところで、三井寺といえば有名な物語があるのをご存知だろうか。すこし長いが、ご紹介してみる。

ひとりのおんながいた。

遠く駿河の国から京の都にむかってとぼとぼと歩いていた。やがて都大路に入ると、東山の清水寺の観音さまにお参りをした。おんなは、人さらいに愛しいわが子を奪われていた。

その夜。

三井寺へゆけと夢のお告げがあった。夢占いをするという男に相談してみると、その男も三井寺の方角は吉だという。そこで近江へと向かった。だが、長い間の心労は、いつのまにかおんなの心を蝕んでいた。狂気のなかで道を急ぎながら、十五夜の夜、それでも寺にたどりついた。

煌煌とした月あかりの中に、月見をする寺僧たちの影がならんでいた。どこかで寺男がつく鐘の音が聞こえて来る。その鐘の音に魅かれるように鐘楼へと近づいた。寺の者がそれを咎めたが、おんなは古詩を詠みながら許しをもとめ、みずから鐘をついて浮き浮きと戯れた。

やがておんなは秋の夜に朦に映る湖畔の光景を心ゆくまで愛ではじめた。十五夜にふたたび静寂が訪れる。ふと、その目が、寺僧のかたわらにいる稚児に向いた。そこには、探し求めていたわが子の姿があった。

おんなの心から狂気が去った。

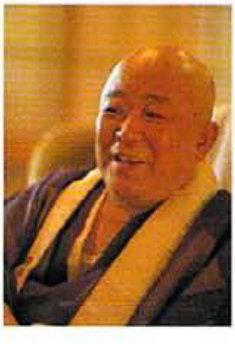
彼女は、わが子の手をとると駿河の国へと帰っていった…

これが能の"狂女もの"の中でも一、二を争う名作といわれる『三井寺』である。作者は不詳だが、もしかすれば世阿弥かも知れない。

文／三村　渓・写真／大田　メグミ

近くの商店街にて。かつては買物客でごった返した。

これは道明氏と慈泉の叶匠寿庵。今では年商数十億の和菓子屋さんであるが、飛躍のきっかけは円満院にある。市の観光課から脱サラした当時の社長は、三浦氏の(無償の)援助を受け円満院の中で和菓子を販売。これがアタリにアタって今の基礎を築いた。もとは円満院の文化財を写真撮影する際に知り合ったというふたりだが、三浦氏は社長と出会ったときから「この人は絶対に成功する人だ。応援してあげなければならない」と感じたという。まるで小説にでてくるような逸話だ。



PROFILE

三浦　道明

昭和九年年十一月九日生まれ。滋賀県立女子師範付属小学校、岡中学校、滋賀県立大津東高校を経て大阪商業大学卒業。芦屋大学院修士課程修了。十二歳で得度以来、修業を重ね現在、円満院第五十六代門跡。また、華道保幹流然流家元・中華人民共和国復旦大学／青島大学客員教授・日中気功学会会長を勤める。これまで著わした著書は三十冊以上。超宗派の僧侶集団である円満大乗会の其主としても活躍中。「心に寺を建てよう」をモットーに多方面で異名をとる六十歳。